

結婚に関する大学生の意識 ― アンケート調査結果から ―

山田 誠
(愛媛大学)

【要旨】

家族像の変化、多様化が指摘され、晩婚化や未婚化・非婚化の現象が進行するなかで、結婚に対する意識や態度の動向が注目されている。結婚や家族の形成は、青年期における重要な課題の一つといえるが、青年期にある大学生は、結婚について現在どのような意識を持っているのか。このことは、学習プログラムの開発をはじめ、青年期の学習支援方策を検討する上でも重要である。そこで、本稿では、結婚に関する大学生の意識について、調査結果の分析・考察をもとに、その特質の一端を示した。

I. はじめに

今日、近代家族像のゆらぎが指摘されている。実際、種々のメディアの報じる、単独世帯の増加、晩婚化、未婚化、少子化、離婚と単親家族の増加、女性の職場進出と性別役割分業意識の変化、夫婦別姓への要求、さらに非婚のカップルや同性のカップルの出現など様々な動きは、家族像の変化、あるいは家族の多様化の現れでもあろう。

伝統的「家」制度から欧米型夫婦制家族へという図式を越えて生じてきている、こうした多様性は、必ずしも伝統や常識にとらわれない多様な家族のあり方、多様なライフスタイルの選択が可能となりつつあることを示唆しているようにもみえる。しかし、家族に関する近年の様々な現象は、家族とは一体何なのか、あるいはまた、家族という制度的・集団的枠組みを基本として考えるのか個人を基本として考えるのか、といった根本的な問題を提起している。そして、「基礎的社会集団」たる家族のあり方における変化は、関連する諸分野での法律や政策の見直し、夫婦役割や性別分業のあり方の見直し等の動向とも相互に影響を及ぼし合いながら、今後の社会のあり方や私たち一人ひとりの生き方についての問い直しを求めていることも見過ごされてはならない。

一般に家族とは、「夫婦関係を基礎にして、そこから親子関係や兄弟姉妹の関係を派生させるかたちで成立してくる親族関係者の小集団」であり、婚姻を前提としている(1)。すなわち、結婚によって夫婦関係が創出され、人間生活の基盤である家族が形成される。結婚＝夫婦関係は、家族の重要な構成要素のひとつである。したがって、人びとの結婚観や実際の結婚の様態は、家族生活のあり方に影響を与えるものと思われる。結婚という制度についてどう考えるかという問題は、家族のあり方についての問題とも密接に関連し合っている。また、今、わが国の少子化を促進している直接的な原因は、晩婚化と非婚者の増加にあるといわれており(2)、こうした人口動向の問題との関連でも、今後の結婚に対する意識や態度の動向が注目されている。

「配偶者選択をはじめとして結婚ないし家族の形成は、青年期における重要な課題の一つ」(3)とされる。それでは、この結婚について、青年期にある大学生は実際どのような意

識を持っているのだろうか。調査結果をもとに、結婚に関する大学生の意識を探り、青年期の学習プログラム開発上の手がかりを得たい。

II. 調査の概要

1. 調査方法：留置法による質問紙調査(4)
2. 調査対象：私立松山大学、私立松山東雲女子大学、国立愛媛大学の3年生を中心とした男女学生合計 295 名 (有効回収数 295 票)
3. 実施時期：1998 年 11 月上旬
4. 回答者の属性：所属は松山大学 113 名、松山東雲女子大学 95 名、愛媛大学 87 名。性別は女性 222 名 (75.3%)、男性 73 名 (24.7%)。学年は 1 年 7.8%、2 年 7.1%、3 年 68.8%、4 年 10.5%。専攻分野は人文・社会系 48.1%、教育系 30.2%、経済・経営系 16.3%、理・工系 0.3%、その他 5.1%。居住形態は自宅通学 49.5%、寮 1.4%、独り暮らし (主に自炊) 29.5%、独り暮らし (主に外食) 16.9%、その他 2.7%。出身地は愛媛県内 68.1%、県外 30.8%、その他 1.1%。家族の人数は 1 人 0.3%、2 人 0.7%、3 人 5.1%、4 人 33.2%、5 人 28.1%、6 人 8.8%、7 人 4.4%、8 人 1.0%、回答なし 18.3%。家族構成では 93.9% が両親がおり、約 3 割 (29.2%) の学生が家で祖父または祖母と同居。恋人の有無は、女性 43.2%、男性 45.2% が現在恋人がいると回答。

III. 調査結果

1. 結婚への意思

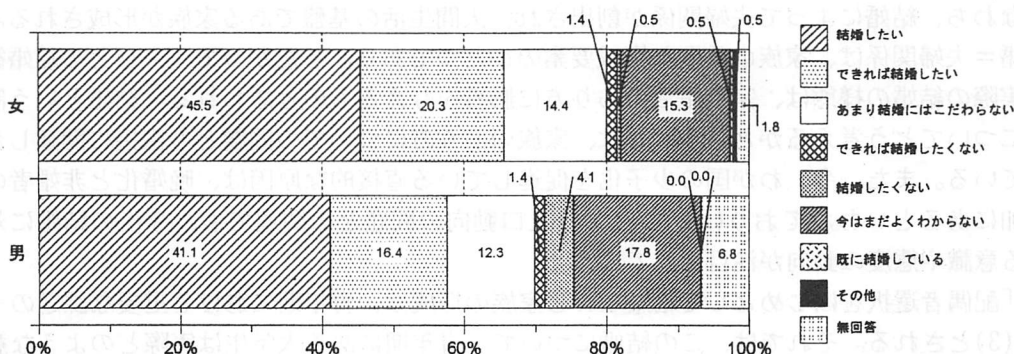
(1) 全体のほぼ 3 分の 2 が結婚を希望

将来の結婚の意思について、「結婚したい」および「できれば結婚したい」という回答を合わせると、女性 65.8%、男性 57.5% で、結婚を希望する割合は女性の方が多少上回っている (図 1)。他方、「できれば結婚したくない」、「結婚したくない」という回答者は男女ともにごく少数で、むしろ、「あまり結婚にはこだわらない」という柔軟派や「今はまだよくわからない」とする流動的な回答の合計が、男女ともほぼ 3 割を占めた。

(2) 希望結婚年齢はほぼ「世間並み」?

上記の「結婚したい」、「できれば結婚したい」という回答者に対し、何歳くらいまでに結婚したいかを尋ねたところ、男女ともおよそ 4 分の 3 (女性 74.7%、男性 73.8%) が

図 1 結婚への意思



具体的な希望結婚年齢を回答し、その平均値は女性が 27.4 歳、男性が 28.2 歳であった。これは、1997 年の平均初婚年齢、女性 26.6 歳、男性 28.5 歳（厚生省「人口動態統計月報年計（概数）」）とほぼ一致している。希望年齢の分布をみると、女性では 25 歳と 30 歳、男性では 30 歳にピークがみられた。なお、「何歳でも、年齢にこだわらない」という回答が、男女ともに 2 割を上回った（女性 21.2 %、男性 21.4 %）。

2. 「結婚」のイメージは「愛」と「信頼」

「結婚」という言葉からのイメージについて、31 の選択肢（愛、夢、誠実、信頼、平等、自立、協力、パートナーシップ、安定、幸福、希望、腕力、成長、発展、ゴールイン、スタート、責任、契約、義務、依存、束縛、犠牲、賭け、妥協、見栄、失望、幻滅、苦勞、忍耐、諦め、その他）から選ぶよう求めたところ（複数回答）、男女ともに第 1 位は「愛」（女性 51.8 %、男性 46.6 %）、第 2 位は「信頼」（女性 46.4 %、男性 41.1 %）となった。女性では「協力」が「信頼」と同率で 2 位に並ぶ。以下、女性で、「幸福」（39.6 %）、「スタート」（32.9 %）、「責任」（28.4 %）の順。男性では、「幸福」（39.7 %）、「責任」（35.6 %）、「協力」（34.2 %）、「スタート」（23.3 %）と続く。

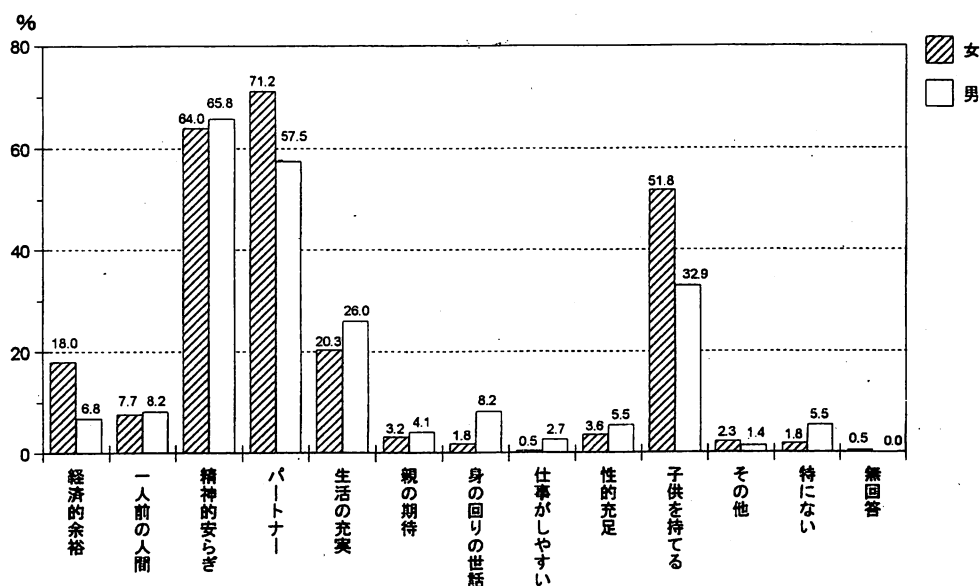
マイナスのイメージを感じさせる言葉の選択率は、男女とも一般に低かったものの、男女差に着目してみると、女性で「忍耐」（18.0 %、男性 6.3 %）、「苦勞」（17.1 %、男性 4.5 %）が、男性で「束縛」（17.8 %、女性 7.7 %）、「犠牲」（11.0 %、女性 3.2 %）、「義務」（11.0 %、女性 4.1 %）が、相対的に高くなっている。

3. 結婚のメリット・デメリット

（1）利点は「パートナー」と「安らぎ」

結婚のメリット（3 つまで選択）について性別にみると、図 2 のように、女性では、選択率の高いものから「人生におけるパートナーが得られる」、「精神的な安らぎの場が得られる」、「子供を持つことができる」の順。少し離れて「生活が充実する」、「経済的に余裕

図 2 結婚のメリット（3 つまで）

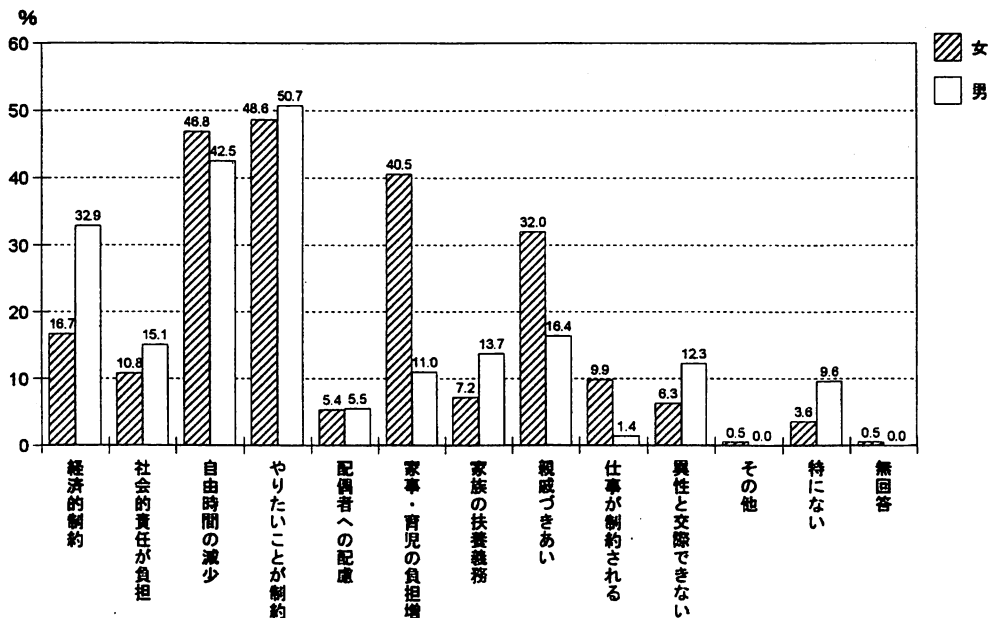


が持てる」が続く。男性では、「精神的な安らぎの場が得られる」がトップで、「人生におけるパートナーが得られる」、「子供を持つことができる」、「生活が充実する」と続いている。なお、「子供を持つこと」については順位は同じだが、選択率ではかなり女性が上回っている（18.9ポイント差）。また、「身の回りの世話をしてもらえる」について、男性の方が相対的に高くなっている（女性1.8%、男性8.2%）。

（2）不利益は「制約」

逆に、結婚のデメリット（3つまで選択）については、図3のように、男女とも第1位は「自分のやりたいことが制約される」、2位が「自由に過ごせる時間が減ってしまう」であった。しかし第3位以下は、女性では「家事・育児の負担が多くなる」、「親戚づきあいなどが増えることがわずらわしい」、「経済的に制約される」の順であるのに対して、男性では「経済的に制約される」、「親戚づきあいなどが増えることがわずらわしい」、「社会的責任が負担になる」と、男女で違いがみられた。

図3 結婚のデメリット（3つまで）



4. 結婚相手の条件は「性格」と「家庭を大切にする」

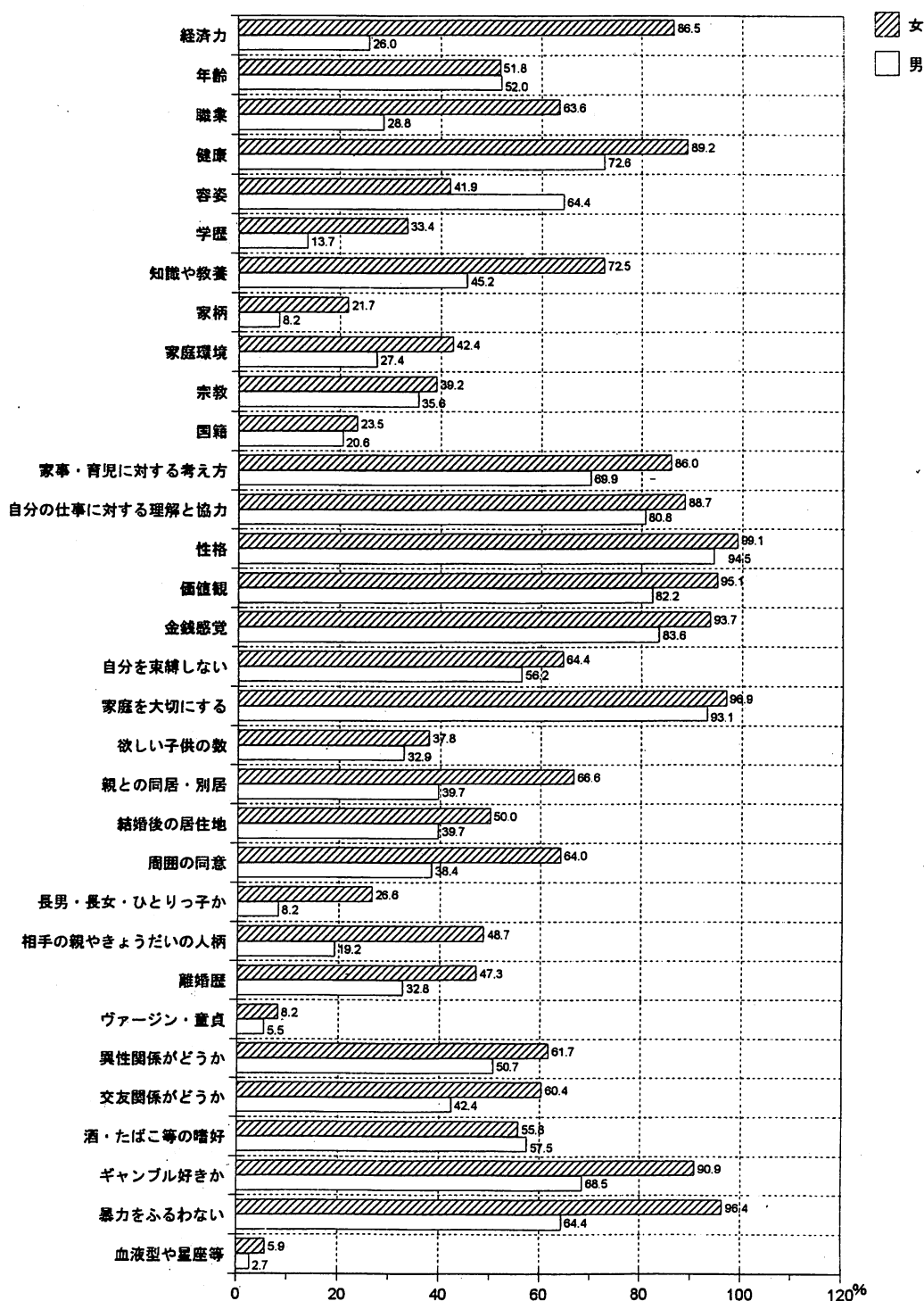
結婚相手の条件としてどのような項目を重視するかについて、「非常に重視する」および「ある程度重視する」という回答を合わせた割合を性別にみると図4のようになる。

男女ともに第1位は「性格」、第2位は「家庭を大切にする」で、一致している。

次に第3位から第10位までをみると、女性では、「暴力をふるわない」、「価値観」、「金銭感覚」、「ギャンブル好きか」、「健康」、「自分の仕事に対する理解と協力」、「経済力」、「家事・育児に対する考え方」の順となる。男性では、「金銭感覚」、「価値観」、「自分の仕事に対する理解と協力」、「健康」、「家事・育児に対する考え方」、「ギャンブル好きか」、第9位に「容姿」と「暴力をふるわない」が並び、それに「酒・たばこ等の嗜好」が続く。

なお、「容姿」を除いたほとんどの項目において、重視の度合いが、女性の方が男性を上回っていた。

図4 結婚相手の条件（非常に重視＋ある程度重視）



5. 結婚形態等に関する意識

(1) 結婚の形態等については柔軟化の傾向

「国際結婚」や「未婚の母」、マスコミ等で近年取り上げられることも多くなった「同性同士のカップル」や「できちゃった結婚」、「事実婚」、そして「離婚」について、学生たちはどのように受けとめているのだろうか。

「まったく抵抗はない」および「あまり抵抗はない」という回答を合わせた割合をみると、「国際結婚」(女性 55.9 %、男性 53.4 %)、「できちゃった結婚」(女性 54.5 %、男性 50.6 %)、および「事実婚」(女性 53.1 %、男性 63.0 %)については、いずれも男女ともに5割を超えるほど柔軟化してきている(図5および図6)。婚外子出生率にも関連してくる「未婚の母」についても、抵抗が「ある」・「ない」の割合が、男女ともほぼ拮抗しつつある(女性:「ある」51.3 %・「ない」44.2 %、男性:「ある」45.2 %・「ない」45.2 %)。

これに対して、「同性同士のカップル」、また若年層を中心に容認派が急速に増えてきているとされる「離婚」についても、大学生においては、「大いに抵抗がある」および「少し抵抗がある」という回答を合わせると、男女ともに過半数を占め、特に前者については男性の抵抗感が一段と強かった(同性同士のカップル:女性 54.9 %、男性 78.1 %、離婚:女性 64.4 %、男性 68.5 %)。

図5 結婚形態等について〔女性〕

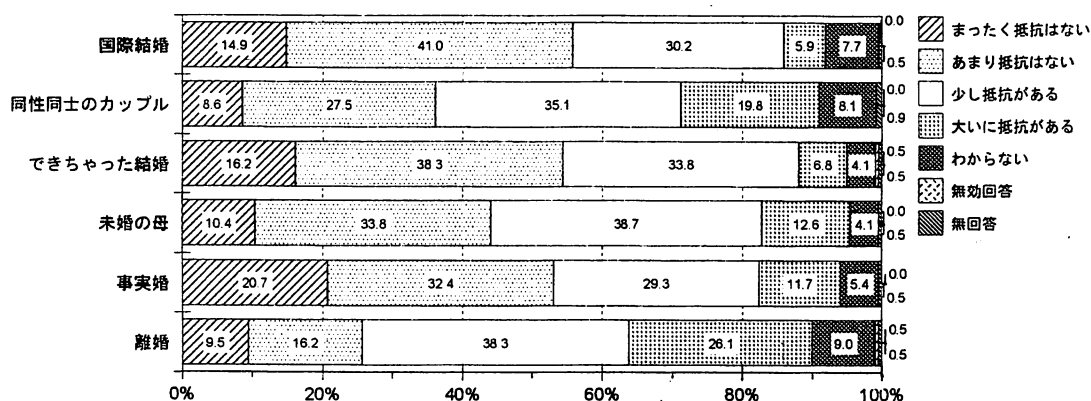
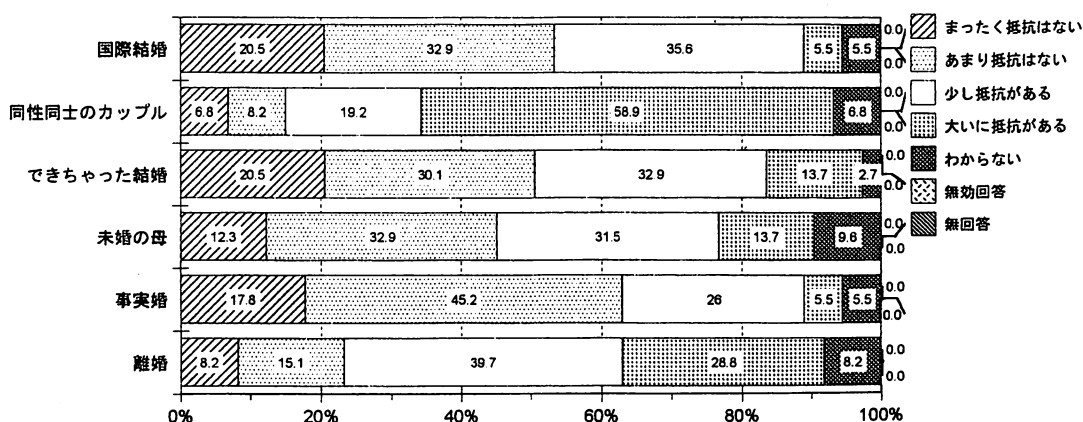


図6 結婚形態等について〔男性〕



(2) 夫婦の「姓」については、半数が選択的夫婦別姓を支持

さらに、夫婦の「姓」について、どんな意見を持っているか尋ねた。男女とも、「同じ姓になるか、姓を変えないままにいるか、選べる方がよい」という選択的な夫婦別姓を支持する意見が最も多く、ほぼ半数を占めた（女性 51.4 %、男性 42.5 %）。他方、「夫婦は同じ姓になった方がよい」（女性 29.3 %、男性 35.6 %）および「同じ姓になった方がよいが、旧姓が通称として使えるとよい」（女性 12.6 %、男性 13.7 %）を合わせると、夫婦同姓を支持する意見も半数近くあることがわかる。選択的夫婦別姓を支持する割合は女性の方が、夫婦同姓を支持する割合は男性の方が、若干高いようである。しかし、「結婚しても、姓を変えない方（夫婦別姓）がよい」とする意見の比率はきわめて低かった（女性 1.4 %、男性選択者なし）。なお、女性 5.0 %、男性 8.2 %が「わからない」と回答している。

IV. 考察

1. 結婚に対する「距離感」

希望結婚年齢の分布からは、以前からいわれてきたライフコース上の「30 歳」の節目意識が、大学生たちの間においては今もある程度生きているように思われるが、他方、結婚の意思のある者でも、「年齢にこだわらない」という回答が男女とも2割を超えたことが注目される。調査対象者の約7割は大学3年生、すなわち21歳前後であることから、希望年齢の平均値に基づけば、結婚を希望する大学生にとっても、結婚は、卒業・就職を経て、まだ6～7年も先のこととして位置づけられていることになる。これに、結婚への意思に関する調査結果にみられた結婚に対する流動的な回答の存在も考え合わせると、社会で晩婚化や未婚化・非婚化が進む中、大学生にとって現時点で結婚は、切実でリアルティをもった自らの問題としては捉えにくくなってきている側面もあるように思われる。また、当初の希望年齢に近づくと、「逃げ水」のようにさらに遠のくことも考えられよう。

2. 男女間の意識の相違

女性の方が結婚を希望する割合も高く、男性を上回る半数以上が子どもを持てることに結婚のメリットを感じながらも（結婚と生殖の結びつきが、ある程度維持されていることの現れともとれる）、女性の約4割が家事・育児の負担増をデメリットとして挙げていた。女性は、結婚のイメージとして「協力」が2位に位置するものの、理想とは裏腹に大きなディレンマに直面することを察知している。そのことが、相手の条件に関する重視の度合いにも認められたように、結婚に関する女性の意識をより高くしているように思われる。結婚のデメリットのうちでも、特に「家事・育児の負担増」（女性 40.5 %、男性 11.0 %）、「親戚づきあい」（女性 32.0 %、男性 16.4 %）、および「仕事が制約される」（女性 9.9 %、男性 1.4 %）については、女性に比して男性の選択率が低く、男女差が顕著である。これは、家事・育児の負担や親戚づきあいを男性の方がデメリットとは感じていないというよりも、むしろはじめからそれらを結婚相手の役割として期待しており、仕事が制約される懸念が少ないということなのではなかろうか。家事・子育てと仕事の両立が、女性の側に偏って求められている現状がある。また、結婚によって「経済的に余裕が持てる」ことをメリットとする比率は男性の方が低く（女性 18.0 %、男性 6.8 %）、逆に「経済的に制約される」こと（女性 16.7 %、男性 32.9 %）、「家族を扶養する義務が生じる」こと（女性 7.2

%、男性 13.7 %) をデメリットとする比率は男性の方が高くなっている。夫は主たる働き手・稼ぎ手として家族を養う義務を負い、妻は家事・育児の中心的担い手であって、親戚づきあいの負担も大きく、仕事の継続は困難——。こうした社会の性別役割分業意識の根強さが、青年男女の結婚観を通して現れているとみることができよう。この状況はさらなる晩婚化・未婚化、そして少子化にもつながりかねない。固定的な性別役割分業の是正とともに、子どもを産み、育てやすい社会的な環境整備も必要である。

結婚相手の条件について、選択率における男女の開きに注目すると、女性は、相手の「経済力」、「職業」など相手の直接的な属性とともに、「相手の親やきょうだいの人柄」、「親との同居・別居」、「周囲の同意」といった結婚によって生じる環境や人間関係をも重視している。これは、男性への経済的依存傾向ないし強い期待、家意識、嫁に老親介護や同居を期待する意識が、社会の中に依然として定着していることの反映ではなかろうか。

V. おわりに

以上、大学生の結婚観について、性別による分析を中心にその特徴をみてきた。概ね他の関連調査にみられる傾向や近年の社会の動き・現状を反映しているようである。結婚に関する意識の変化、柔軟化や多様化がみられるものの、とりわけ結婚のデメリットや結婚相手の条件等に現れているように、社会の中の性別役割分業意識の根強さが、なおも様々な面で大学生男女の意識を規定しているように思われる。今後の課題として、職業観や家族観、学歴の違いや職業の有無、学習経験、親との同居、地域性等、他の諸要因との関連で、さらに精緻な分析・検討が必要であろう。

ちなみに、本調査において学生の関心のある学習領域について尋ねた結果を、関心が「大いにある」「かなりある」の合計でみると、女性では、1. 「自立、自分らしさ、自己実現」66.7 %、2. 「結婚、家族」64.8 %、3. 「子供、子育て」64.0 %、4. 「仕事や職場」60.8 %、5. 「恋愛」56.8 %の順となる。一方、男性では、1. 「環境問題」56.2 %、2. 「仕事や職場」52.1 %、3. 「自立、自分らしさ、自己実現」50.7 %、4. 「高齢化問題、高齢者福祉」46.5 %、5. 「ボランティア活動、社会参加」43.8 %と、男女で学習関心に違いがある。女性は結婚、家族、子育て、仕事を視野に入れたかたちで自立や自分らしさ、自己実現に強く関心を向けているに対して、結婚や家族、子育ては男性の学習関心の上位には入っておらず、男女の学習関心にも伝統的な性別役割分業意識の強さを看取できる。学習プログラムの開発において、こうした男女の意識の差に十分配慮が必要である。

【注】

- (1) 「家族」『社会学小辞典〔新版〕』有斐閣、1997年、70～71頁。
- (2) 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘『未婚化社会の親子関係』有斐閣、1997年、iv頁。
- (3) 岡村 益・壁谷沢万里子「現代青年の結婚に関する意識—地方大学学生の性別比較を中心として—」『上越教育大学研究紀要』第6巻第3分冊、1987年、337頁。なお、この他に、本稿に関連する大学生対象調査研究として、三村芙美子「亜細亜大学生の『結婚』に関する意識調査」『亜細亜法学』31巻2号、1997年、295～316頁、等がある。
- (4) 本調査は、平成10年度文部省委嘱事業「青年男女の共同参画セミナー（社会人予備軍のための未来開拓セミナー）」の事業の一環として実施された。